



日本美術院理事長に就任した
西田俊英さん

撮影：安達康介

にしだ・しゅんえい
1953年三重県伊勢市生まれ、武蔵野美術大学日本画科卒業。同大在学中に院展初入選、奥村土牛、塩出英雄に師事。83年山種美術館賞展優秀賞。84年東京セントラル美術館日本画大賞展大賞。93年文化庁芸術家在外研修員として一年間インドへ移住。95年再興院展大観賞(97年も)。96年天心記念茨城賞。98年日本美術院同人に推挙。2005年再興院展内閣総理大臣賞。12年MOA岡田茂吉賞大賞。17年《森の住人》で日本藝術院賞。同年日本藝術院会員となる。22年から屋久島を題材に100メートルの巨大絵画《不死鳥》を制作中。現在、日本藝術院会員、日本美術院理事長、広島市立大学名誉教授、武蔵野美術大学名誉教授。

院展は研究発表の場であり、人間性を養う〴〵人間道場、でもある

長く院展理事長を務めた田淵俊夫、那波多目功一代表理事（7月1日に逝去）両氏が任期満了により退任、同理事会において、業務執行理事の西田俊英氏の理事長就任（6月19日）が決まった。100年を超える歴史の中、傑出した画人たちを輩出してきた院展への期待をこめて、新理事長の思いを聞いた。

●「革新の上に成り立つ伝統」「画格と品格」を大切に、守っていく

——まずは日本美術院理事長就任、おめでとうございます。今の率直なお気持ちを聞かせください。
私は武蔵野美術大学3年生のときに、初入選いたしました。当時主任教授の塩出英雄先生に会場で会った折に意気揚々と挨拶をしたのですが、先生は困ったような顔をされて「君か…入選してしまったのか…。これから長いと思うけど、とにかく続けるのだよ。それが一番大事なことになるだ」と祝いの言葉もなく去っていかれました。その言葉を信じ、半世紀以上出品を続け、制作活動の軸としてきました。まさかこのような日が来るとは夢にも思っていなかったもので、正式決定の連絡を受けた際には、ただただ驚くばかりでした。

——西田先生は理事長就任までは業務執行理事を務めておられましたが、理事長とはどのような存在だと感じておられましたか？
かく続けるのだよ。それが一番大事なことになるだ」と祝いの言葉もなく去っていかれました。その言葉を信じ、半世紀以上出品を続け、制作活動の軸としてきました。まさかこのような日が来るとは夢にも思っていなかったもので、正式決定の連絡を受けた際には、ただただ驚くばかりでした。

様々な問題を運営委員や理事たちで検討し、理事長に判断を仰ぎます。私は業務執行理事として直にご相談することも多かったのですが、田淵前理事長は広く世を見て、常理的確な判断をされていたので、深く尊敬をしておりました。その責務を受け継ぐというのは大変なことだと感じております。

——日本美術院は100年以上の歴史を持ち、いまでは公益財団法人でもあります。その長と

ると、相当なプレッシャーもあるのではとお察しします。

理事長職という重い職務への不安から、就任決定後に那波多目功一先生にご相談しました。先生は「院展には革新を土台とした伝統があります。そして、作品の画格、品格を重視します。これらを守っていただけたらと思います」と、「またいつでも相談にのりますからね」と優しく仰ってくださいました。残念ながら先生は、その後2週間も経たない7月1日に帰らぬ人となり、私が先生から賜った最後のお言葉となってしまいました。理事長を務める上で一番大事なことを教えていただけたと感謝しております。

●優れた人格の先輩から生き方そのものが伝えられていく場所にしたい

——那波多目先生が伝えられた「革新の上に立つ伝統」について、どのように解釈されますか？
院展においては革新の精神、それこそが伝統だということだと思います。伝統だけ重んじていては守るだけで成長が少ないですが、新しい試みをしようとして絵面だけひねくり回しても、深みがないのでいずれ飽きてしまいます。いつときの画面上の優劣よりも、その画の向こうに覗きでる作者の人間性が大事であり、その人間性が修行により深くなっていく品格が重要だだと思います。そもそも岡倉天心先生のもと、当時朦朧体と揶揄された先人達はめげず、切磋琢磨し合いながら、近代日本画の巨星となりました。今やデジタル技術の進化やAIの登場などで美術の様相は変わり、日

本画も大なり小なり影響を受けていますが、時代を越えても、なお輝き続ける作品を研究することが必要です。例えば小林古径先生の《猫》はシンブルな線で白い猫が佇む姿を描いた軸の作品です。その瞳には仏性が宿り、なんともいえない画格が漂い、その猫は古径先生そのものと感じます。それはAIでも表現できないものだと思っております。様々な先人達が懸命に努力しながら、誰の真似をすることなく絶えず挑戦し続け、己の画の道を極めてきた革新と伝統の精神をこれからも大事にしていきたいと思っております。

——院展は、過去には丸木スマが入選したり、いまでも一般入選作にいわゆる「院展風作品」とは思えない作品も見受けられます。この懐の深さ、広さが院展の大きな魅力だと思えます。

院展は単に受賞を目指すコンクールではありません。院展再興の際に「芸術の自由研究を主とする。故に教師なし先輩あり。教習なし研究あり」と宣言をしています。単独で独自の絵を描く研究を行う人材が出品して来る場所であり、そのような人材を増やしていきたいと思えます。

——「画格、品格」については、どのようにお考えでしょうか？

私は初入選の後、塩出先生を通して奥村土牛先生の門を叩きました。先ほどの言葉どおり「教師なし先輩あり。教習なし研究あり」ですから、細かな指導といったものは全くありませんでした。ひたすら奥村先生の所作を見ながら自ら学んできました。両先生は清の時代の画家、書家・惲南田の芸術論から「意は遠きを貴ぶ 静かならざれ

ば遠からざるなり 境は深きを貴ぶ つぶさならざれば深からざるなり」という言葉を大切にしておられ、私に伝えてくださいました。私は、静かな心がなければ、遠い境地は生まれません。その境地において人生や自然の真理を感じさせる深い作品が誕生するのだと思います。両先生亡き後は、松尾敏男先生、そして那波多目先生に大変お世話になりました。いま振り返ると、私がお世話になった4人の先生は最期まで「静かな心」を持ち、「深い作品」を描きました。このような出会いを経験できるのは、院展が「研究を主とする」だからだと思います。院展は研究の成果の発表であり、人間性を養う「人間道場」でもあるからだと思えます。

——新理事長として日本美術院、院展の近未来像をどのように描いていますか？

「自然がいい。飾ると嫌味が出る。自然を極めれば必ずから抽象が出て来る。その一人だけの味が」。奥村先生が大事にされていた言葉です。初代理事長の安田鞆彦先生から奥村土牛先生、小倉遊亀先生、平山郁夫先生、松尾敏男先生、田淵俊夫先生と続いてきました。其々の時代で流行が変わっていくのは世の流れだと思えますが、どの先生も時代を越えてなお輝いている作品を描かれています。小林秀雄氏が「美とは画家の生命に触れることである」と語っています。私自身もまだまだですが、生命が息づく作品を目指し、切磋琢磨しながら研究していく院展であって欲しいと思っております。

——有難うございました。